



人生一般二相對論

須藤 靖 著

東京大学出版会, 206 頁, 2,400 円

読み物
お薦め度
4
☆☆☆☆★

坂本龍馬が人気である。告白するが、私は、坂本龍馬が有名かつその熱烈なファン^{*1}が多くいることは認識していたものの、この人物が日本史上いったい何をしたのか、日本の歴史を揺るがすようなことでもしたのか、イマイチわからずにいた。しかしその未熟な認識は、今年から始まった福山雅治^{*2}主演の大河ドラマを何となく見ているうちに大きく覆ろうとしている。自らの足で旅をし続けた彼は、地方によって全く異なるさまざまな文化や考え方があることを知り、大局的には日本と欧米の文化の違いをもそれぞれ固有のものとして認め、幕末の多くの日本人にその違いを乗り越えさせ、時には大きな盟約にこぎつけた。そういう意味で彼もまた「相對」論的に文化を見つめ「絶対」的価値を見いだした一人なのかもしれない。幕末に大きく日本が変わったのは、この時代の光り輝く志士たちの活躍の陰で、まるでダークエネルギーのように彼らの心を動かしていた彼の存在があったからではないだろうか。

さて、坂本と同じ土佐のいごっそうである著者は、物理学者としてその激動の半生の中で、さまざまな文化・慣習の違いに出くわす。それは高エネルギー物理実験と光赤外天文観測の違い、物理と音楽の違い、アメリカの朝の挨拶、太陽の色、

サンドイッチ、○×^{*3}、韓国の食事マナー、中国の点滴、イギリスの電車の降り方、など実に多岐にわたる。それらは多少の違和感を著者にもたらしたが、教科書などいくつかの例を除き、本書^{*4}で著者はそれを「異文化」とは言わず「相對性」と言い切り、心地良さに変えようと読者に伝えようとしている。今や第2の地球探しにまで至る著者の研究の方向性には、こうした異文化、もとい相對性を見たい、そしてそれを超えたい、という動機が働いているのかもしれない。物理法則がこの宇宙で普遍的である^{*5}とするならば、物理こそが宇宙の文化を超える唯一の道具なのではないだろうかという甘い期待を再認識させられる。

最後に、私が本書で一番感銘を受けたのは、おなじみ東大出版会がこのような書籍を出版しようと決意したことである^{*6}。伝統と格式を併せ持つ学術出版社の最新刊としては、異色の内容となっているが、まさにそのことが著者のめざす「陳腐を超える」ことを体現している。がんばれ^{*7}、東大出版会！そして天文月報もそろそろ陳腐なその殻を脱却^{*8}する時がきているのではないだろうか。がんばれ、天文月報！

柏川伸成 (国立天文台)

*1 最近では「歴女」と呼んだりもするらしい。ちなみにハワイ観測所の K くんも、ある意味歴女に大人気である。

*2 本書「ガリレオ・ガリレオ」によると、著者はご令嬢より「福山雅治の横顔はパパに似ている」と言われたらしい。このエピソードを最後の演習問題でも再掲するあたりは少々自慢気味である。

*3 これは伏せ字ではない。そんなことをしようものなら月報編集部の人 Y 嬢が研究室にまで飛び込んでくる。

*4 ちなみに天文月報 2010 年 6 月号 412 頁の「寄贈図書リスト」で本書のタイトルが「人生一般＝相對論」と誤植になっている。気持はわかるが、本書の背表紙を見ればこのような間違いは犯さない。

*5 そして巷の噂の法則の普遍性を系統的にリサーチするのが本書で頻出する「探偵ナイトスクープ」である。

*6 これでは著者の立場がないとお叱りを受けるので、個人的に本書で一番共感をもった警句は「役に立つことは役に立たないことをするために役立つ」。本書「物理とカラオケ」より。

*7 本書で「がんばれ！」などの温かいエールを送っているのは、哲学者、海底人、外耳炎、女子高生、小学生、文科省、昭和 30 年代、など。著者の様々な文化に対する懐の深さと、それよりも深い愛を感じるのを禁じえない。

*8 ご意見、ご要望はどしどし月報編集部までお寄せください。また編集部では殻を脱却した原稿をお待ちしております。